

2010.12.19

ハンセンボランティア「ゆいの会」の活動
を振り返って（2010）

会長 近 藤 剛

1 「ゆいの会」結成への思い

1999年の瀬戸内訴訟提訴以来、ハンセン病問題に関わるようになりました。そのなかで、市民の一人として、長年にわたり多大な人権侵害を継続し、ハンセン病を病んだ人々の人生を翻弄してきた我が国のハンセン病政策の歴史を後世に正しく伝える責務を痛感するとともに、ハンセン病回復者の人々が家族や故郷等の絆を取り戻すための活動をしたいと切実に思いました。このような思いを抱いていた2000年12月には、ハワイのモロカイ島にある国立カラウパパ歴史公園を訪れました。そこでは、当時、50人に満たないハンセン病回復者が暮らしていました。重要な文化的・歴史的・教育的・景観的資源の保護を図るため、法律に基づき、入所者の生活やプライバシーを守りながら、歴史を伝える活動が着実に行われていると感じました。また、2004年以降、韓国全羅南道高興郡道陽邑にある小鹿島（現国立小鹿島病院）を訪問するなかで、戦前日本がその小島にハンセン病療養所小鹿島（ソロクト）更生園を作り、過酷なハンセン病隔離政策をおこなってきた結果、入所者が重い後遺症を負って生きてきたことを知りました。その一方で、現在では、大勢の若いボランティアが、ハンセン病回復者のために活動する姿にも素直に感動しました。

カラウパパやソロクトで経験した、歴史を伝えることの重要さや市民のボランティアの力は、岡山で「ゆいの会」を立ち上げるにあたって大きな示唆を与えてくれました。

なお、カラウパパに関しては、入所者やその家族、研究者等で作る NPO 団体の「オハナの会」が、長年支援活動しています。

2 「ゆいの会」結成に向けて

2001年5月の熊本判決以降、長島でも社会復帰を希望する入所者の声が聞かれ、瀬戸内弁護団でも社会復帰を支援する体制を作る必要を感じていました。翌年3月には、弁護団と医療ソーシャルワーカーらが中心となり、社会復帰希望者とともに岡山市内の県営住宅の見学を行い、4月には、療養所に近い西大寺地区で地域の住民も交え「社会復帰を考える集い」を行いました。しかし、社会復帰希望者の中からは、「社会復帰していいことがあるのか。」「社会復帰してやっていけるのか。」という不安の声が多く聞かれました。社会復帰がいかに困難で不安が大きいかを改めて知り、安心して社会復帰できる環境を作る必要を強く感じ、ボランティアを養成するため「ハンセンボランティア養成実行委員会」という団体を、弁護士や医療ソーシャルワーカーや社協のメンバー15名ほどで、立ち上げました。長島愛生園、邑久光明園の各福祉課の協力も得られることになり、2003年4月に第1回養成講座を開催し、同年9月27日に、同講座を修了した第1期生が、自治会の日野さん、谷本さん、宇佐美さんの協力で「歴史館ボランティア」を初めて体験しました。

2004年3月には、団体の名称をハンセンボランティア「ゆいの会」と改め、本格的な活動を始めることになりました。

3 「ゆいの会」の活動について

ゆいの会の活動は、社会復帰支援のみでなく入所者の方々の要望に応じる形で、3つの類型に分けて、様々な活動を行っています。（1）外出型（里帰り、語り部活動（講演会）、趣味活動の際の付添いなど）、（2）訪問型（朗読、引っ越し手伝い、買い物手伝い、退院時の

介助、お話相手、パソコン指導など）、

（３）園内全体型（夏祭りの準備、歴史館運営（館内と園内ガイド）などです。入所者の里帰りなどの介助については、当初は、日帰りのみの介助に限定していましたが、いつしか県外の宿泊を伴う介助を行うようになりました。今では、２泊３日の里帰りや旅行の介助が普通となりました。長島愛生園にある「愛生歴史館」の運営については設立当初からボランティアとして参加しています。2008年には、大勢の会員が参加して、岡山市内で、「新あつい壁」の上映会や入所者の「油彩展」（市内のギャラリーで１週間開催）の支援を行ったこともあります。その他、長島愛生園では、ハンセン病関連資料整理の仕事にも携わっています。作業は、古い関連資料をマイクロフィルムにおさめていく、地道な作業ですがとても大切な活動です。そして、本年５月８日、９日、第６回ハンセン病市民学会 in 瀬戸内は、「島を語る」をテーマとして、島の過去・現在・未来を当事者自らが語ることを中心におき開催されました。２日間にわたる総会・交流集会には、１０００名以上の参加者が集いました。１年に及ぶ準備には当会が中心となり、たくさんの会員が岡山の現地実行委員会の中心メンバーとして、あるいは大会当日のボランティアとして、大きな力を発揮し大成功を収めることができました。

また、２園の将来構想の関係では、将来構想をすすめる会・岡山の構成メンバーとして参加しており、今年度には、同会では、両園の将来構想案をまとめ、厚生労働省に提出する予定となっています。

今後、邑久光明園での展示資料室でのガイドボランティアや長島愛生園においてかつて活発な活動をしていた文芸協会の資料整理等についても検討しています。

４ ゆいの会の活動を通じて感じているこ

と

「ゆいの会」は、毎年一回ボランティア養成講座を開催し、ボランティア養成講座の修了生の中から若い世代を含む多くのボランティアとして、登録してくれています。多くの受講生は、ハンセン病についてはこれまでほとんど知らなかった人たちであり、講座を受講することで、ハンセン病の医学や歴史を学び、歴史の現場で語り部であるハンセン病回復者から直接お話を聞くという貴重な体験を積んでいます。会員からは、国の政策により、家族や故郷との絆を切り裂かれ、甚大な人権侵害を受けながらも人間の尊厳を失うことなく人生を生き抜いてきた人々のやさしさや強さにふれて大きな感銘を受けたことや、ボランティア活動を通じて、自分のこれまでの生き方を振り返ることができ、自己実現の貴重な機会を得られた、という感想もよく聞きます。今後、療養所の将来構想との関係で、ボランティアの活動の場は広がると思われる、療養所と社会との交流を促進する上で、ボランティアの果たす役目はますます期待されてくると考えています歴史館や歴史的建造物のガイドボランティアなどの要望も増えてくると思われ、若い人を含め一緒に活動してくれる人をさらに着実に増やしていきたいと考えています。

２つの園には、ハンセン病市民学会 in 瀬戸内の分科会 C「ハンセンボランティアの現状と課題」でパネリストとして参加していただいた神戸大学大学院人間発達学研究科、虹の会おおさか、山陽女子高校などたくさんのグループが、それぞれの形でボランティア活動を行っており、今度ともこれらのグループとも連帯し情報交換をしながら、息の長い活動をしていきたいと考えています。